

やわらかボールといちねんせんそう

Jどたま

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

連邦軍が極秘裏に開発した超兵器

その名もやわらかボール！

この物語はやわらかボールとかいう謎の兵器が一年戦争ですごく頑張るお話である！

## 【注意】

微妙に兵器開発時期や戦史スケジュールが原作とは違う場面が多々あります。

原作キャラが性格などなど含めてまったく別物になっている可能性がありますので、そういったものが苦手な方はご注意ください。

また、今回初投稿になりますので気長に気軽に読んでいただけたら幸いです

## 目次

|                        |    |
|------------------------|----|
| やわらかボール 大地に立たない        | 1  |
| やわらかボールとV作戦            | 9  |
| やわらかボール やっぱり大地に立たない    | 13 |
| はじめてのおつかい              | 17 |
| ガルマ 散らない               | 25 |
| やわらかボールとククルス・ドアンの島(前篇) | 30 |
| やわらかボールとククルス・ドアンの島(後編) | 36 |

やわらかボール 大地に立たない

ゴップ「困った。困ったぞ。」

後にルウム戦役と呼ばれる会戦で連邦軍宇宙艦隊は数に劣るジオン軍にそりやあもうコテンパンにやられたのでした。

その上、最高指揮官であるレビル將軍がジオン軍に捕まってしまい、指揮系統も大混乱。

ティアンム「うむ。困ったなあ」

かわって指揮をとったティアンム中将率いる残存宇宙艦隊がどうにかこうにか必死に抵抗して

ジオン軍が連邦軍本部ジャブローを狙って仕掛けたコロニー落としを阻止したんだけども

そのコロニーは三つに分かれて北米やオーストラリアやいろいろなところに落ちちやっただので

そりやあもう、地球は大混乱ですよ。

ゴップ「で、連邦議会はジオンの独立くらい認めたらええやん？って雰囲気で講和条件も殆ど飲む気にいる」

ティアンム「うむ。ジオンのコロニー落としのせいで人がめっちゃ亡くなったからな。議会がビビるのも無理はあるまい」

ゴップ「だが、講和条件を飲んでみろ。ジオン独立どころか地球連邦が瓦解しかねんぞ」

ティアンム「ぶっちゃけ、あれ、事実上の降伏勧告だもんなあ」

そうなのでした。先のルウム戦役で大勝利をあげたジオン軍は連邦軍に降伏勧告を行い

大打撃を受けた連邦軍はそれを飲むしかないとおもわれていたのです。

ゴップ「とりあえず、ティアンムが出してた連邦宇宙艦隊再建計画は予算通るようにしといたでー」

ティアンム「ゴップまじ有能」

そんな中、連邦の降伏という事態を避けようとゴップさんとティアンムさんはマジ頑張っていたのでした。

ゴップ「でもなあ。ジオンの開発したあの、ザクとかいうモビルスーツ。あれに対抗できないと戦争続いても負けるんじゃない?」

ティアンム「とりあえず、新型制宙機のセイバーフィッシュなら少しはザク相手でも対抗できるみたいだから、新しく建造する戦艦にはそいつらの空母としての機能も兼ねるよう設計させといた」

ゴップ「ティアンムまじ有能…:といたいところだけど、それだけじゃあ決め手につかない?」

ティアンム「うむ。そこでちよつと考えがある。この作業用モビルポッドってあるだろ?そいつらに長射程砲を載せただけの兵器を設計した」

ゴップ「ふむ。ハッキリ言って、動く棺桶だな」

ティアンム「こいつら一機一機はともかくに対抗できるような代物ではないんだがな?安いし、しかもすぐに大量に作れる。」

ゴップ「なるほど、物量作戦というわけか?」

ティアンム「これをRB-79。ボールと名付けたのだが、セイバーフィッシュでザクを遅滞させている間に、大量に用意したボールで弾幕を張ってザクの射程外から攻撃する。これなら対抗の目もできてよう」

ゴップ「ティアンムぐう有能」

ティアンム「現状これ以上の案はあるまいよ。レビルのヤツがいてくれれば、また違った策も出せるかもしれないがな」

ゴップ「そうだな。とりあえず、セイバーフィッシュとボールを各軍事工廠で全力生産するよう指示だしておく。予算はどうかぶんどってくるわ」

ティアンム「ゴップぐう有能」

こうして、どうにか戦備を整えることで連邦の降伏を避けようと頑張るゴップさんとティアンムさんでした…

が

ゴップ「ちくしよおおおおお!どいつもコイツもひよりやがって!今、講和を結んだらジオンに地球を好き勝手されると何故わからん!!」

先のコロニー落としに恐怖した地球連邦議会は講和派が多数を占めていた。

ゴツプ「こうなれば……もう手段は選ばない……。正攻法が通じぬならば正攻法いがいで墮とすまでよ……」

後の歴史家はこう語る

ゴツプまじ有能 と

彼は、議員一人一人を説得した。

ジオンの危険性を説き、自分達の勝利の可能性を説き、

それでも通じぬ相手にはスキヤンダルでもなんでもチラつかせ

ありとあらゆる手段でもって議員達を説き伏せて、講和条約の調印を阻止し、戦時条約の締結のみにとどめたのである

レビル「あれ？ワシのジオンに兵なしっていう演説は？」

ありません

どうにかゴツプの活躍により降伏を免れた地球連邦

しかし、ゴツプの疲労はピークに達していた。

ゴツプ「あー……もう癒されたい……。戦争なんかどーでもいい。そういやあアニメすっかり溜めてたなあ。録画消化しよつと」(リモコンピッ

ダキシメテー ギンガノハチエマレー！

このとき、モニターに映し出された映像にゴツプは天啓を見た気がした。

ゴツプ「そうだよ……。戦わなくても、相手の戦意を削げばいいじゃん！戦わなくてもいいくらいに……！」

疲労の極限に達していた彼は正常な判断ができなくなっていたのかもしれない。

ゴツプ「そうだ……。ボール一機と予算がちよびつと残ってたな。これを使って、こうして、こうだっ！」

かくして、ゴツプ大將肝いりの計画として『ボールを使って敵の戦意を削ぐ兵器を作れ！』というなんだかよくわからない計画がスタートしてしまっただけであった。

連邦が継戦を決定して数週間。

ゴツプとティアンム以下、多くの者の尽力により連邦宇宙艦隊は急速に再建しつつあった。

連邦が継戦を決定したのにも、この生産力とそれを支える資源があつたことが大きな理由の一つであつた。

そんなある日のこと。

博士「ゴツプ大将。できましたよ。ボールを使って敵の戦意を削ぐ兵器！」

ゴツプ「へ？」

ゴツプ自身もすっかり忘れていたのだが、そんな計画がありました博士「いやー、苦勞しましたよ。ほとんどボールを一から作り直したんですから」

ゴツプ「うん？で、どんなんできたの？なんかジオンが地球への降下作戦を開始しそうだからさ、使えるならジオン降下部隊迎撃作戦に投入したいから見せて」

博士「わかりました。おーい、こつち来て挨拶しなさい」

(・・ω・)ノ どうもこんにちわ

ゴツプ「はい。こんにちわ。って何これ？」

そこには直径約13mくらいのまるっこいなにかがいた。

博士「はい。これが敵の戦意を削ぐ兵器！その名もツ

シュババババツ！博士はかっこいいポーズを決めた

博士「やわらかボールです！」

(・・ω・) やわらかボールです

ゴツプ「お、おう」

ゴツプは反応に困った。

ゴツプ「で、コイツ……」

博士「やわらかボールです」

ゴツプ「やわらかボールは何ができるの？」

博士「やわらかいです」

ゴツプ「お、おう」

博士「とりあえず触ってみてください」

(\*・ω・)(ムニヨンムニヨン)

ゴツプ「こ、これは…!?なんとという弾力!?つきたてのお餅でもこうはいくまい!?しかも、そこはかとなくヌクイ!?!」

博士「ふつつつ。これは私が依頼を受けてから5日で完成させた新型装甲、モフチタニウムを使いました!」

ゴツプ「それはそれで凄いな!?!」

博士「理論上、このもふもふ具合ならザクマシンガンの直撃を受けてもふによんと弾けます」えっへん

ゴツプ「まじ!?!じゃあ今いるボールの装甲を全部そのモフなんとかに…!」

博士「モフチタニウムです」

ゴツプ「モフチタニウムに換装したら防御面ではかなり強化されるんじゃない?!」

博士「それは無理です」

ゴツプ「は…?!なんで」

柱一ω・) ゴツプさんおこってます。こわいです

博士「まず、モフチタニウムの原料がもうありません。全部使いきつちやいました。次に手に入るのは次の木星船団が戻ってきてからですかねー」

ゴツプ「oh…!」

博士「それに、まだ問題があります。このモフチタニウムは寒冷地ではその柔軟性が失われます。」

柱一ω・) はい。寒いのが苦手です

ゴツプ「ってちよつとまてーい!それじゃあ宇宙空間では…!」

博士「はい。当然ですが活動できません。そんなことしたらやわらかボールがカチコチボールになります」

ゴツプ「まじかよ…!」

(…ω・) まじです(えっへん

ゴツプ「いや、褒めてないからそんなドヤ顔しないでね」

(…ω・) ざんねんです



ゴツプ「で、コイト…」

博士「やわらかボールです」

ゴツプ「やわらかボールは武装とかあるの?」

博士「ないです」

(・・・) ないです

ゴツプ「ないのかよ!? って180mm砲はどうした!」

博士「取り外しましたよ。」

(・・・) あぶいです。

ゴツプ「取り外しましたよじゃない!? あと、あぶいじゃなくて危ないね!? それより武装なしでどうやって戦う気なのさ!」

博士「さあ?」

(?・・・) さあ?

ゴツプ「なるほど確かに戦意が削がれる…っていうか疲れる…」  
とまあそんなおり

士官「ゴツプ大将! ソロモン宙域に集結していたジオンが地球降下ポイントへ向けて移動を開始しました!」

ゴツプ「まじかよこんな事してる場合じゃないわ、迎撃態勢の準備急ぐよう各方面に通達するぞ!」

博士「我々は」

(・・・)? どうしますか?

ゴツプ「君らはサイド6あたりでのんびり…じゃなくって運用テストでもしてなさい」

ゴツプ大将もこれ以上彼らの相手をしてるとさらに疲れそうなので、とりあえずサイド6に送っておくことにしました。

ゴツプ「あそこは中立コロニーってことになってるから皆と仲良くしてくれ」

(のっそのっそ)。。。 (・・・) わかりました。さっそくいつてきます

博士「じゃ、行ってきますねー」

こうして、やわらかボールはサイド6へと向かうのでした。

さて、一方その頃

オペレーター「ティアンム中将！セイバーフィッシュ部隊、押されています！」

ティアンム「ボール隊を後退させつつ引き撃ちさせろ！ボール隊がザクに取り付かれたら終わりだぞ！」

衛星軌道上ではティアンム艦隊が奮戦を続けていた

ティアンム「くっ…！これ以上押し込まれればジオンのHLV突入を許してしまう…。かといって今突撃させればボール隊もセイバーフィッシュ隊も壊滅は免れまい…。」

しかし、奮戦空しくティアンム艦隊は後退を余儀なくされていた。

ティアンム「仕方があるまい。地上に降下したジオンは地上戦力に任せる！艦隊後退！戦線の再構築急げ!!」

しかし、なおも襲い来るジオン軍ザク部隊！

ザク「ひゃっはー!!蚊トンボどもがあっ！」

セイバーフィッシュ「うわーやーらーれーたー」

ザク「このまま後ろの丸っこいのをやってやるぜえ！」

ボール「ひ、ひい!？」

ついにボール隊に襲いかかるザク隊！

このままボール隊はザクに蹂躪されてしまうのか!？」

…そのとき…!!

ザニー「レッツ!!ビイビイビイビイイルツ!!」

ザク隊へたった一機突入する一機のモビルスーツ！

ザク「なんだとお!?!連邦のモビルスーツとでもいうのか!？」

そのパイロットこそが

レビル「そう！それこそがワシ！レビル將軍じゃよ!!」

突然の敵モビルスーツ登場、突然の敵最高司令官の登場に混乱する

ザク隊

ザク「つっていうかレビル！あんた捕まってただろ!？」

レビル「逃げてきた!」

ザク「すげー簡潔すぎんだろ!？」

レビル「あとこっさりザクのデータ連邦に送ってザニー作っても

らっっておいた!!」

ザク「見張り仕事しろ!？」

そんなわけで捕虜になってもタダでは起きない男、レビル將軍

レビル「ふっはっはっは！喰らえザクども！あたまあああ…ブウア

アアアアルカンツ!!」

ザニーの頭部から発射される60mmバルカン

ザク「いてててて、撤退いいいい、撤退いいいい」

突然のレビル將軍と敵MSの登場により撤退していくザク達

ティアンム「助かったけど、なんか別な頭痛の種が増えた」

まだ高笑いを続けるレビル將軍をみつつティアンム中將は頭を抱えるのでした。

## やわらかボールとV作戦

レビル「なあなあ。ゴツプ。もっと強いMSが欲しい。ザニーじゃダメだ。新しいの作って」

ゴツプ「おいこら帰ってくるなりいきなりそれか。今、こっちは忙しいんだ。MSなんぞに予算割いてられるか」

ゴツプ大将は地球に降下したジオン軍を迎え撃つ準備でとても大忙しです。

レビル「だからな？MSと戦うならMSが一番だ。だからザクよりもすっげー強いMSを作ったら絶対勝てるって」

そんな簡単にザクよりもすっげー強いMSが作れたら苦労はしません。…が

レビル「ほら、ちよつとこれ見てくれ。ジオンから逃げるときにぶんどってきたザクのデータから流用して設計したMS案なんだけどさ」

ゴツプ大将はレビル將軍の提示したMSコンセプトに目を通すと、

ゴツプ「お前、基本バカだけど頭いいよな」

レビル「照れるぜ」

ゴツプ「いや褒めてないからな」

レビル「このすっげえ強いMSを作ってザクをボコろう大作戦を略してV作戦って呼ぼう！」

ゴツプ「略してねえ!?!」

こうして連邦軍は本格的なモビルスーツ開発計画を推し進める事になるのです。

一方その頃、サイド6では

カムラン「次！」

ザク・ワーカー「ザク・ワーカーです！軍事目的ではありません！」

カムラン「ダメ！武器がある！帰れ！」

ザク・ワーカー「そんなー」（すげすげ）

サイド6の検察官カムランさんがお仕事しつかり頑張っていました。中立コロニーのサイド6には兵器は入れません。

カムラン「次！」

(・ω・)ノ やわらかボールです！

カムラン「よし！通れ！」

。。。 (・ω・) やったぜ。

でもやわらかボールは兵器だと思われませんでした。

こうして無事にサイド6へやって来たやわらかボール

博士「じゃあ、早速運用試験をはじめようか」

(?・ω・) なにをしたらいいですか？

博士「そうだね。まずは、ノボリを立てよう」

(っ・ω・)っ PPP のぼりたてます

博士「うんうん、さすがに元は作業用ポッド。上手に出来たね。」

(\*・ω・) えっへん

何故かそのノボリには『やわらかボール参上！』とか『やわらかボール有ります』とか『ただいまやわらかボール実演中』とか書いてあるので

周囲の人達にととても目立ってしまいました。

そんな事はお構いなしにやわらかボールと博士は運用試験を重ねていきました。

またまたところ変わって、今度はサイド7。

こちらでは、レベル將軍がV作戦を開始していた。

レベル「よし、テム・レイくん。予算と人員と資材は(ゴップが)用意した！」

テム・レイ「じゃあ早速ガンダムとガンキャノンとガンタンクつくりますね」

レベル「頼んだ！」

テム・レイ「あっ?!?しまった?!?」

レベル「どうした!?!」

テム・レイ「ガンタンクに頭バルカン付け忘れたああああ?!?!?」

レベル「何やつとるんだ貴様ああああ?!?!?」(バキイ

テム・レイ「殴ったね?!?親父にもぶたれたことないのに!!」

レビル「そりゃあ貴様の息子のセリフだろうがあああああ!!」(コブラツイスト)

テム・レイ「ガンダムとガンキャノンにはちゃんと頭バルカンつけたからかんにんしてええええええええ!」

レビル「しようがないな。今回だけだぞ」

こうして、レビル將軍とテム・レイ博士は仲良くV作戦を進めていたのですが

ゴップ「レビル。いい加減帰ってきて地上迎撃作戦の指揮とつてくれないとそろそろヤバイぞ」

そうなのです。

連邦がモビルスーツ開発を進める間にもジオンは快進撃を続け

北米大陸やオテッサやアフリカ大陸の一部などを次々占領していったのです。

レビル「じゃあ、テム・レイくん。ワシ、地球に戻るけど、はよガンダム作ってね!」

テム・レイ「がんばります!」

このあたりで少しジオンの皆さんの様子も見てみましょうか。

ドズル「最近、連邦の連中がモビルスーツ開発を進めてるらしいな?」

アカハナ「みたいっすね」

ドズル「ちよっとお前、その計画阻止してこい」

アカハナ「わかりました」

ドズル中将から命令を受けたアカハナさん。

彼はジオンの中でも潜入工作のスペシャリストです。

まずは連邦がどこで兵器開発してるか調べてみることにしました。

アカハナ「えーっと、連邦軍ってどこで新兵器を開発していますか?」

さっそく彼はY a h O O知恵袋に投稿してみました。すると

アカハナ「なにになに? サイド6で連邦軍が新しい何かを開発してるだ?! 早速潜入してみよう!」

アカハナさんは丁寧なお礼コメントを返信しベストアンサーをつ

けると早速サイド6へ向かいました。

どうやらサイド6で運用テストを行っているやわらかボールとV作戦を勘違いしちゃったようです。

これは、やわらかボール大ピンチ!? 次回へ続くぞ!?

やわらかボール やつぱり大地に立たない

博士「はいーい！やわらかボール実演中ですよー！寄ってらっしゃい見てらっしゃい！」

サイド6ではやわらかボールの運用テストが続いていました。

。。。 (・ω・) そうこうテストです

住民「おー。自転車くらいスピードはでてるぞー」

(・ω・) つつ々々。ぶぎうんようテストです

住民「おー。ケンダム上手だな」

最初は何やってるのか不思議に思ってたサイド6住民も、物珍しきに見物に集まるようになっていました。

こうして見物客も集まっているせいで、サイド6で連邦軍が何かやってるといふ噂はジオンにまで知られていました。

アカハナ「そんなわけでサイド6にあるやわらかボール試験場へとやってきたのだ」

ジオン工員のアカハナさんもこの場にやってきていました。

アカハナ「しかし、このまんまるが連邦軍のモビルスーツ？」

。。。 (・ω・) ノ おうだんほどうをわたるときはてをあげましよう

子供たち「はいーい」

アカハナ「どうみてもモビルスーツ以外の何かな件」

とはいえ、やわらかボールが何なのかわからないと報告のしようもないので

アカハナさんは夜中にこっそり忍び込んでみることにしました。

なんとってアカハナさんは全身タイツ。潜入はお手の物です。

アカハナ「そんなわけでこっそり潜入してみたのですが」

オフトン——ω—— Z z z z :

アカハナ「ドズル中將。自分の中にある兵器の概念が崩れ去りそうです」

オフトン——ω——？

アカハナ「なんか目を覚ました件。っていうかパイロットは中にい



るのか!？」

オフトン「ω・ω」ノ なかに だれも いませんよ。

アカハナ「中に誰もいなくても動くのか…。もうこれよくわかんねーな」

オフトン「ω・ω」ところで、どちらさまですか？

アカハナ「あ、申し遅れました。アカハナです。」

オフトン「ω・ω」人 どうも。アカハナさん。やわらかボールです

挨拶は大事。

オフトン「ω・ω」どんなごようけんでしよう？

アカハナ「あ、えつと。そう。取材、取材だよー。」

オフトン「\*・ω・ω」しゅぎい…。テレビかな（わくわく

アカハナ「で、早速教えてほしいんだけど、やわらかボールくんは一体なんなんだい？」

オフトン「ω・ω」？ さあ？

ほんとなんなんでしょうね？

アカハナ「そうだ。美味しいお菓子があるのでお外でお話聞かせてもらえないかな？」

オフトン「ω・ω」知らない人についてつちやいけませんって言われました。

アカハナ「(ちい!?!よい子め!?!)」

博士「うん？なんか声がするなあ。誰かきてるのかい？」

アカハナ「やべえ。逃げなきゃ」(すすすす)

オフトン「ω・ω」!!

博士「やわらか。起きてたのかい？誰か来てたのかな？」

「ω・ω」ノシ はかせ！すごい！アカハナさんおとしなかつた！

博士「うん？アカハナさん？」

「ω・ω」ノシ さつきまでいたの！すすすーってあつというまにいなくなったの！

博士「そうかそうかー。もしかしたらサンタさんかもしれない

ねー」

オフトン「\*・ω・」アカハナさんまたきてくれるかなー

博士「いい子にしてたらきつとくるさー」

アカハナ「ふう。危ないトコだった。とりあえずドズル中將に報告するかな。」

アカハナさんはまとめた報告書をドズル中將に送りました。すると、すぐに返信がありました。

ドズル「報告書読んだけど、これももうわかんねえな」

報告書：やわからかボールについて

まんまる。触るとすぐやわからかふかふかもちもち。

どうやらパイロットいなくても動くという不思議なもの。

移動速度は自転車くらい。

戦闘能力はなさそう。

たぶん、これ兵器じゃないっす。

ドズル「うーん、多分これV作戦のダミープランだろ」

アカハナ「だと思えます。で、どうします?」

ドズル「サイド6との関係悪化覚悟してまで仕掛ける事はないだろ。帰ってこーい」

アカハナ「いいんすか?」

ドズル「シヤアがたまたまサイド7でV作戦っぽいのを見つけたらしい」

アカハナ「それじゃあ、とりあえず戻りますね」

こうしてアカハナさんは帰っていきました。

一方でホワイトベース隊の皆さんはシヤアのおかげでえらい大変な目にありました

いろいろあつて、どうにかこうにかサイド7を脱出することが出来ました。

そして、やわからかボール達は…

(・ω・) おてがみきました。

博士「えーと?なにになに?ゴツプ大将の胃がストレスでマツハだからジャブローまで来て欲しい…って書いてあるね」

( ・ ω ・ ) おみまい いきます！

こうして本人も知らない間にピンチを脱出したやわらかボールは地球へ向かう事になりましたとき。

はじめてのおつかい

「やわらかボール達がまだサイド6で頑張っていた頃、地球では…」

ゴツプ「とりあえず、地上戦ではこっちに一日の長つてやつがあるな。」

最初は地球に降下してきたザク達も地上戦ではちよびつと苦戦してました。

セイバーフィッシュ「地上用ブースターを装備したボクが制空権を確保します。」

フライマンタ「で、制空権が確保されたら高高度から爆撃します。61式戦車」で、俺が足止めすると」

ゴツプ「これで航空戦力がないジオン降下部隊なんて一ひねりだ！」

と、思っていた時期がゴツプ大将にもあったのです。

ジオン降下部隊が作戦を開始してしばらくすると…

ドツプ「ヨロシクニキーwwww」

ドダイ「ヨロシクニキーwwww」

ドダイ+ザクIIJ型「ヨロシクニキーwwww」

ゴツプ「おいこらレビル!?なんかやべえからさっさと戻ってこい!？」

こうして、レビル将軍がサイド7でテムレイ博士とガンダムを作ってる間に地球は着々と侵攻されてるのでした。

レビル「いやいや、いい具合だよ?」

ゴツプ「どこがだ!？」

レビル「まず、ジオンに橋頭保は確保されたし鉱物資源産出地も抑えられた。だが、こんな広範囲の戦線維持できると思うか?」

ゴツプ「なるほど。補給線は確かに伸びきっているだろうな。」

レビル「補給線が伸びれば伸びるほどジオンには不利になる。」

ゴツプ「それはなんでだ?」

レビル「ジオンに兵なし!」

ゴツプ「ほう？」

レビル「ジオンに兵なし!!」

ゴツプ「なんで二回言った。」

レビル「だってこの演説したかったんだもん！」

たしかに補給線の伸びきったジオンと地上でもMSに対抗しきれない連邦軍。

戦線は膠着状態に陥った。

その膠着状態の間にV作戦は着々と進んでいってました。

ついでにやわらかボールもサイド6でのんびりしていました。

レビル「これでウチのMSが完成したら勝つる!!」

と思っていたら、試作MSをジャブローに運搬する予定だったホワイトベースがシャアの妨害でジャブローじゃなくてジオン勢力圏内の北米に降下しちやいました。

ゴツプ「マジっすか…」

かなりの予算を割いていたホワイトベース隊がジオン勢力圏に落ちた事でゴツプ大将のストレスゲージがマッハだったのです。

一方で全然脅威だと思われなかったやわらかボールは特に邪魔されることもなく予定通りジャブローに降下したのでした。

そんなこんなでジャブローに降下したやわらかボールは

(っ・ω・)っ そんなわけでゴツプさんふかふかします。

ゴツプ「ああ〜癒されるんじゃあ〜」

そろそろヤバかったゴツプ大将のストレス解消に役立っていたのでした。

ストレス解消されたゴツプ大将も頑張ってお仕事しまくっていたのですが…ホワイトベース隊は孤立無援で大変なことになっていました。

コーウエン「ゴツプ大将。北米に落ちたホワイトベース隊には補給が必要です。」

ゴツプ「補給してやったらなんとかなる?」

コーウエン「なるなる。」

ゴツプ「わかった。補給物資は手配する」

コーウエン「ゴツプ大将マジ有能」

ゴツプ「世辞はいい。だがどうやって補給物資を届けるんだ？」

コーウエン「補給部隊のエキスパート、マチルダ中尉に任せます。」

ゴツプ「そつか。じゃあ頑張ってもらおう」

コーウエン「ところでゴツプ大将。うしろのそれ、なんスか？」

(っ・ω・)っ　ゴツプさんをふかふかしています。

ゴツプ「やわからかボールだ。」

(・・ω・)ノ　やわからかボールです。

コーウエン「ああ。それが噂の…」

ゴツプ「とてもふかかなのでストレスフリーだ。」

コーウエン「お気に入りのところ、申し訳ないのですが…今回そのやわからかボールにもホワイトベース補給作戦に参加してもらいたいです。」

ゴツプ「なん…だと…」

(・・ω・)？

ゴツプ「なななななにをさせるつもりだ」

コーウエン「マチルダ隊が単独でジオン勢力圏内を突破するのは非常に難しいでしょう。そこで、やわからかボールが陽動に出ます。」

ゴツプ「ちよつとまで!?やわからかボールは戦力にはならんぞ?!」

コーウエン「いえいえ。やわからかボールの装甲はザクマシンガンどころかザクバズーカの直撃を受けても平気という報告があがっています。」

ゴツプ「だが、いくらなんでも無茶がすぎるだろ!？」

コーウエン「やわからかボールはマチルダ隊とは別方面に進出して、少しだけ敵の目をあつめたら速攻でジャブローに逃げ帰ってくるだけですよ。」

ゴツプ「ううむ…。しかし…。」

(・・ω・)ノ　いききます

ゴツプ「まじすか」

(・・ω・)ノ　ホワイトベースたすけます

こうしてホワイトベース補給作戦ファイチャリングやわからかボ―

ルが開始されました。

(\*・ω・) かつこいいです

やわらかボールは大きなリュックを背負い、そしてそこには「ホワイトベース補給し隊」という旗が立っていました。

ちなみに、リュックの中身はんまい棒がたくさん入っています。

博士「じゃあ行こうか」

。。。 (・ω・) はーい。

そして、割と危険なはじめてのお遣いにてかけるやわらかボールはたくさん連邦将官の敬礼に見送られてお出かけしていきます。

博士「あ、歩くの疲れるから、コクピットに乗せてくれるかい？」

(・ω・) わかりました。

連邦将官s 「「コクピットあつたの?!?!」」

博士「そりゃあ、やわらかボールはボールだからね。コクピットくらいあるさ。みんなやわらかボールを何だと思ってるんだい？」

連邦将官s 「「こつちが訊きてーよ?!?!」」

博士「そして、このコクピットはぬくぬくふかふかで居住性ではどのMSもかなわないぞ」(えっへん

ゴツプ「(しまった!?!その手があつたかあああああ!?!)」

ゴツプ大将はやわらかボールに乗るといふ発想はなかったようです。残念でしたね。

こうしてやわらかボールは単独ではじめてのお遣いに向かいました。

博士「ふーふふふ〜んふ〜ん♪ふふふつふふふ〜ん♪」

。。。 (・ω・) ふふふ〜ん♪ふふふ〜ん♪

博士とやわらかボールは楽しく鼻歌なんて歌いながら進んでいきます。

やはり北米大陸に近づくと

ザク「見張りしてます。」

ザクが見張りしていました。

(；・ω・) どうしよう…

やわらかボールは考えました。

( . . ω . ) ノ こっさりいきます

やわらかボールはこっそりとザクの後ろを通ることになりました。

;;;;;; ( . . ω . ) アカハナさんのまねっこです (すそそそそ

ザク「うん？なんだ気のせいか」

( . . ω . ) b? やったぜ

と、なんとか見張りのザク達をやりすごしながら進んでいきますが

...

? || || || || ( \ ^ シ ; ω ; ) ノシ ひいーん とうとうみつかり

ました

ザクA「怪しいまるっこいのがいるぞー！」

ザクB「ホワイトベースに補給し隊って書いてあるぞー！」

ザクC「ホワイトベースってなんだ？」

ザクD「なんかわからんけどとりあえず撃て撃てー」

ザクマシンガンとかザクバズーカとかフッドミサイルとか無茶苦

茶撃たれまくるやわらかボールだったので

( . . ω . ) ( . . : . ) (ぼよよん

と、全ての攻撃を弾いてしまいました。

ザクA「こうなったら、もっと応援を呼んで囲んで捕まえるぞー！」

ザクBCD「わかったー！」

ドップ「応援きたよ」

ドダイ「きたよ」

マゼラアタック「きたよ」

ルッグン「きたよ」

ワツパ「きたよ」

と、たくさんのジオン軍に囲まれてしまいました。

博士「ふむ。そろそろ頃合いかな？」

? || || || || || ( \ ^ シ ; ω ; ) ノシ どうしますか？

博士「ふっふっふ。奥の手を使う時が来た！やわらかボール最速の

移動手段!!!」

( . . ω . ) ? それは??

博士「いくぞー!!秘密ボタンぽちつとなー!!」



博士はやわらかボールのボタンを押しました。そこにはこう書いてありました。

『転がる』と

三(, ω, )三( ε: )三( ω: )三( ÷ )三( ω, )  
三( ε: ) ゴロゴロゴロゴロ

ザクA「転がったぞー!」

ザクBCD「速いぞ!? 追いつけないぞ?!?」

ドップ「下り坂だし仕方ないね」

ドダイ「そうだね。」

マゼラアタック「ドップやドダイで追いつけないってことは相当速いね」

ルツグン「もうレーダーの外に出られちゃったよ」

ワツパ「見失ったね」

と、完全にジオン軍を振りきることに成功したのでした。

博士「ちなみにこの移動方法には一つ弱点があつてね」

三(, ω, )三( ε: )三( ω: )三( ÷ )三( ω, )

三( ε: ) なんですか?」

博士「簡単には止まれないからどこまで行くのか私にもわからないことさ」

三(, ω, )三( ε: )三( ω: )三( ÷ )三( ω, )

三( ε: ) しよんなあああ(ゴロゴロゴロゴロ

場面はかわってマチルダ隊はやわらかボールの陽動もあつてか無事にホワイトベースと接触していました。

ブライト「まじで補給助かりました。」

マチルダ「なんとか頑張つて一度西のヨーロッパ方面に抜けて欲しいの」

ブライト「わかりました。やってみます。」

と、マチルダ隊からの補給を受けたホワイトベースはニューヤーク方面へ進みます。

そこへ…

セイラ「ブライト。何かが高速で接近してくるわ」

ブライト「まじか。じゃあガンダムをスタンばつといて  
アムロ「らじやー」

三(、ω、)三(ε・)三(・ω、)三(・♁)三(、ω、)  
三(ε：)とまりません(ゴロゴロゴロ

ブライト「あれなんぞ?」

セイラ「なんでしようね?」

ミライ「とりあえず止めてあげたら?」

アムロ「らじやー」

アムロはガンダムでやわらかボールをキャッチしてあげました。

(・ω・)ノ たすかりました。ありがとうございます

アムロ「ブライトー。なんかこの丸っこいの『ホワイトベースに補給し隊』つて旗たつてるぞー?」

ブライト「連邦軍：味方：なのか?」

(・ω・)ノ そうです。ようどうです。(えっへん

アムロ「どういことなんだ…。」

ブライト「それはこつちも訊きたいけど…とりあえず收容しとこ  
う」

こうして、ホワイトベースに收容されたやわらかボール

博士はブリッジに事情説明に行くのですが

やわらかボールはMSデッキにとりあえず收容されました。

ハヤト「うーん?で、このまるっこいのは何をしにきたんですかね  
?」

カイ「補給はさつきマチルダさんに沢山もらったしなあ?」

(っ・ω・)っ んまいぼう たくさんあります

ハヤト「つてこれ全部砕けちゃつてるじゃありませんか!」

カイ「おいおい、これどうするんだよ!」

(・ω・) ごめんなさい

ジオン軍を振りきる為に転がったやわらかボールは勢い余つてホ  
ワイトベースのところまで本当についちやいました。

そしてダミー補給物資のんまい棒も転がってるうちに全部砕けて  
しまつていたのでした

リュウ「ハヤトもカイもやめろ。」

ハヤト・カイ「リュウさん！」

リュウ「ブライトから事情を聞いたが、どうやらマチルダ隊を俺らのところに届けるためにこのまるっこいのが囷役になってくれたらしい」

ハヤト「そ、そうだったのですか」

リュウ「それに、砕けたんまい棒も…。」

リュウさんは二人に炊きたての白米を差し出し明太子味とタコヤキ味の袋の中身をそれぞれにふりかけました。

リュウ「食ってみろ。美味いから」

ハヤト・カイ「…んまい」

リュウ「だろ？まだまだ色んな味があるし、ミックスまで楽しめる」  
ハヤト・カイ「!？」

リュウ「わかったら、このまるっこいのに礼言っどけ。補給ありがとな」

ハヤト・カイ「ありがとう！」

(\*・ω・) ||3 どういたしまして！

こうして、やわらかボールはリュウさん達にたくさん褒めてもらえて、はじめてのお遣いは大成功です。

よかったね！やわらかボール!!

ゴツプ「ぜんぜんよくない！やわらかボールはよ帰ってきてー!!」

## ガルマ 散らない

さて、ホワイトベース隊とうっかり合流しちゃったやわらかボールですが…

割りとお楽しく過ごしているようです

コタツ「\*・ω・」 すっごいぬくぬくです

リュウ「余ってた擬装用シートと電熱線で組み上げたやわらか用のコタツはいい具合みたいだな」

博士「いやあ、助かるよ。MSデツキは寒そうだったからね」

カイ「コイツはぬくぬくだわふかふかだわで」

ハヤト「離れられなくなりますねえ」

と、MSデツキではカイとハヤトがダメになっていました。

コタツ「・ω・」ノ こんにちは。やわらかボールです

・・） ハロデス

博士「はっはっは。新しい友達も出来たみたいだね。」

コタツ「つ・ω・」つ・・）（きやつきや

博士「あのハロというのはアムロ君が作ったのかね？」

アムロ「いや、元は市販されているものを色々改造しただけです」

博士「ほうほう、見たところ中々手間をかけて改造してあるようだがうんぬんかんぬん」

アムロ「ということはやわらかボールもそんな感じでうんぬんかんぬん」

と何故か別なところでも交流が生まれたりしています。

ブライト「で、我々は大西洋へ抜けなくてはならないんだが…」

ミライ「このまま行くとニューヨーク方面を抜けなくてはならないわね」

セイラ「ジオンの基地がある地域の一つ…見逃してくれる程甘くはないと思うけれど」

と思つてると…

セイラ「ドップとガウの編隊をキャッチー！」

ブライト「ええい、仕方あるまい。この先の廢墟地帯へ進路をとれ。」

何とかやり過ぎです。それとガンダム、ガンキャノン、ガンタンクをスタンバらせておけ！」

ミライ「やわからかボールは？」

ブライト「……のんびりしててもらえ」

セイラ「了解」

その頃のジオン軍

ガルマ「よし！木馬はこの先の廃墟地帯へ進路を向けたな。ほんじゃあシャア、いっちよホワイトベースのいぶり出し頼むぞ！」

シャア「わかったー。」

ガルマ「ガンダムか木馬を見つけたら知らせろよ。ガウで仕留めてやる」

シャア「ほいほい。ほんじゃあ勝利の栄光を君に」

で、再びホワイトベース

ブライト「運よくあつた雨天野球場跡にホワイトベースを隠したぞ！」

セイラ「それでガンタンクとガンキャノンを直掩に。ガンダムを陽動にだすのね？」

ブライト「そうだ。アムロ、ザクをホワイトベースから引き離してくれ。」

アムロ「らじやー。行つてきまーす」

ガルマ「うーん、木馬め。どこに隠れた？とりあえず絨毯爆撃していぶり出そうと思つてたんだが、出てこないな」

シャア「こつちも今のとこ見つけられないぞ」

といいつつも本当はシャアは既にガンダムを見つけていました。しかもガンダムの進路から逆算してホワイトベースまで見つけていたのです。

シャア「(うーん。 “アレ” をやるなら今が大チャンスなんだよなー。やろうかなあー。でもガルマってあんなだけ親友なんだよなー)」

シャアは悩んでいました。

シャアは実はキャスバルⅡレムⅡダイクンとかいうジオンの王子

様だったのです！

ところがデキンⅡザビをはじめとするザビ家に王位を篡奪され自身は死んだ事にしてシヤアⅡアズナブルとして生き、ザビ家への復讐をする機会をずっとまっていたのです。

ところがどっこい

シヤア「(ガルマとは士官学校で出会って、なんかよくわからんが色々つかかられて：その度になんだかんだ面白かったな)」

そうなのです。ガルマはシヤアの数少ない友人なのでした。

シヤアは考えました。

考えた結果、こう結論付けました。

シヤア「やってから考えよう。なるようになるさ」

というわけでシヤアはホワイトベースにガルマのガウをやっつけさせる作戦を実行にうつすことにしました。

シヤア「ガンダムみつけた。位置はこの辺な？ガウで仕留めてくれ」

ガルマ「よっしゃ！よくやったあ！」

と、ガルマの乗るガウがちょうどホワイトベースの前に出て無防備な背面を晒すように誘導したのでした

ガルマ「よし！ガンダムみつけた！」

ブライト「絶好の射撃位置だ！砲座確固に照準！撃てー！！」

シヤアの誘いに乗ったガルマのガウはその一撃で致命傷を負ってしまいます。

ガルマ「ただではやられぬ！ガウを木馬にぶつけてやる!!」

シヤア「あ、あれ!? 謀ったな!? シヤア!? つていわないの!？」

ガルマ「へ？シヤア悪くないじゃん？後ろに木馬いるの気付かなかったの私だし」

シヤア「このお坊つちやま育ちめええ!! 少しは人疑えよ!? つていうか君の生まれの不幸を呪うがいいとか言えないじゃん!!」

ガルマ「なんのことだシヤア!? まあいいや！イセリナとか兄上とか姉上とか父上によろしく言つといて！ジーク・ジオン!!」

無理やりガウを反転させたガルマ。もう一息でホワイトベースと

衝突しちやいそうです！

ブライト「ホワイトベース急速発進！回避いー！」

リュウ「間に合うのかよ!？」

? || || || || (っ・ω・)っ あぶい

そのとき、カタパルトから打ち出されたやわらかボールがガウを受け止めました。

さすがやわらかボール。やわらかいです。

しかも

(っ・ω・)っ なかにまだひとがいるのでたすけました

ガルマ「うーん」↑気絶中

でも、ガルマ大佐が戦死したと勘違いしたジオン軍は蜘蛛の子を散らすようにして逃げていきました。

ブライト「危ないところだった。ガンダムとやわらかボールを回収したらこのまま大西洋へ逃げよう」

アムロ「そんじやあやわらか回収してくるわ。ってやわらか、その人どうしたの?」

(っ・ω・)っ けがしてたので たすけました

ガルマ「うーん」↑まだ気絶中

こうしてホワイトベース隊のみなさんはどうにかジオン勢力圏からの脱出に成功するのでした。

ガルマ「うーん：はっ!?!ここは!？」

ブライト「ホワイトベースの中だ」

ガルマ「連邦軍!?!私は捕まったのか!?!」

ブライト「そうなる」

ガルマ「くっ殺せ！」

リュウ「いや、せつかく生きてたんだし、死ぬ事はないだろ。」

ブライト「そうだぞ。捕虜にはなってもらうがちやんと南極条約に従った扱いはする」

リュウ「それに、敵さんにこんな事言うのも何だが、生きてりやそのうちいい事もあるさ」

ガルマ「そ、そうかなあ」

リユウ「そうだ。お前さんを助けたやわらかのヤツも心配してたから後で顔だしてやってくれ。」

ガルマ「(ヤワラカ? ってなんだ?)」

ガルマ「そんなわけでヤワラカ? とやらのところに来たんだが」

コタツ「・ω・」ノ どーも。ガルマさん。やわらかボールです。

ガルマ「このまるっこいのは何なんだ?」

コタツ「\*・ω・」 よくゆわれます

ガルマ「いや、褒めてないとは思うけど…」

リユウ「で、突撃してきたガウを受け止めてついでにお前を助けたのもコイツな?」

コタツ「・ω・」ノ けが へいき?

ガルマ「ああ、うん、おかげさまで」

コタツ「\*・ω・」 よかた!

ガルマ「(しかし、これからどうなるんだろう…)」

大西洋に逃げたホワイトベースは未だに連邦本部とのまともな通信もできません

もちろんガルマが生きてホワイトベースにいる事はジオン軍はもちろん、

ホワイトベース隊以外の連邦軍も知らないのです。

はたして、この先どうなるのやら!?



## やわらかボールとククルス・ドアンの島（前篇）

色々あってガルマを載せたホワイトベース一行は大西洋をヨーロッパ方面へ進んでいました。

コタツ「\*・ω・」はぁー。ぬくぬくですね

ハヤト「そうですねー」

カイ「おーい、お坊ちやま、ミカンなくなりそうだから取って来てくれよ」

ガルマ「なぜ私が…」

リュウ「おいこら、捕虜を虐待してんじゃねーよ。ほら。カイもハヤトも一緒にミカンとりにいくぞ」

カイ・ハヤト「はーい」

コタツ「?・ω・」ガルマさん げんきないです?」

ガルマ「いや、友人と喧嘩をしてみましたのではないかとね」

コタツ「・ω・」そうですね。さびしいですね

ガルマ「そうだね。何が悪かったのかなあ…。シヤア…」

コタツ「っ・ω・」っ ガルマさんどんまい。（ふかふか

ガルマ「そうだね。気を遣わせてすまないね。」

セイラ「ちよつとよろしくて?」

ガルマ「はい。なんででしょうか?」

とやわらかコタツにセイラさんとガルマの二人。

これは何かありそうな予感?

セイラ「あなた、シヤアアズナブルというジオン軍士官をご存知?」

ガルマ「シヤア…知っていますとも。彼とは士官学校で一緒に頼れる部下であり自慢の…友人…でした」

セイラ「そうですね、彼の出身や生年月日などは知っています?」

ガルマ「ええ。知っています。士官学校ではお互いにプレゼントを交換したこともありますよ」

セイラ「(出身地は偽つても誕生日までは誤魔化さなかったのね。変なところで律儀なのもやはり…)」

セイラ「ああ、シヤアは兄さんだったのね……。間違い無かった。」  
ガルマ「うん？シヤアに妹？そんな話は聞いた事がなかったが……」  
セイラ「ああ、ごめんなさい。何でも、何でもないの」

ガルマ「いや、そんな涙まで流されて何も無いはないと思うのですが……」

コタツ「……ω・ω・ω」 セイラさん……

カイ「ああー?!?!お坊っちゃん!?てめえ何セイラさんを泣かせてるんだよ!?!」

ハヤト「これは見過ごせませんね。場合によっては……」(拳パキポキ)  
ガルマ「違うんだ?!誤解だ!?!」

セイラ「いえ。ガルマさんに婚約者さんとの馴れ初めや離れ離れになった経緯を聞いていたら……感動してしまつて。ね?ガルマさん」

ガルマ「お、おう。何もやましいことはない」

リュウ「ふむ。やわらか。本当に何もやましいことはなかったか?」

コタツ「……ω・ω・ω」 セイラさんとガルマさんおはなししてただけです  
リュウ「そうか。悪かったな」

ガルマ「いや。構わない。」

カイ「つていうかお前婚約者とかいるのかよりア充かよくあー!これだからお坊っちゃんは!!うりうり!!」

ガルマ「痛い痛い!?!やめないかっ!?!」

と、その時、艦内放送で……

ブライト『手すきの者は手近なモニターに注目せよ。全周波数で流されているジオンからの緊急放送である。』

ギレン『諸君の愛してくれたガルマは死んだ!!何故だっ!?!』

ガルマ「……………」

ハヤト「……………」

リュウ「……………」

セイラ「……………」

カイ「……………」

アムロ「……………」

コタツ「ω・ω）……………」

ガルマ「生きてますけどおー?!?」

カイ「やつべwwwおもしろすぎるwwwガルマお前国葬されてんぞwww遺影wwwでかすぎwww」

ハヤト「カイwwwさんwwwわらいwwwすぎwww」  
w」

リュウ「いや、連邦本部との通信もまともに出来なくてな。ヨーロッパ大陸まで行けばガルマの無事も伝えられるだろうが…」

ガルマ「つていうかセイラさんまで笑わなくても!？」

セイラ「いえ…ごめんなさい…ぷっ…」

ガルマ「(これ、帰っても居場所あるんだろうか…?)」

コタツ「つ、ω・ω）っ(ガルマさんふかふか

と、そんなおり、しばらく黙って見ていたアムロがつかつかとモニターに近寄り

アムロ「うおおおおおー!」モニターパンチ!

ガシャーン!

アムロ「もう、見なくてもいいだろ。」

セイラ「アムロ手大丈夫!？」

アムロ「ああ、平気平気。」

ガルマ「気を遣わせてしまったようですまない、ありがとうアムロくん。」

カイ「なんか俺らも笑いすぎてスマン。」

ハヤト「ガルマさんもアムロも悪かった。」

カイ「でもよおー?何もテレビ壊さなくてもいいだろおー?」(アムロの肩がし

ハヤト「そうですね、昭和のお父さんじゃないんですから」

コタツ「\*・ω・ω）みんななかよし

とかやっていると艦内放送がなります

フラウ『リーダー内にザクを発見。ガンダムとコアファイター出撃してください。』

アムロ「らじゃー。じゃ、行ってくる。」

リュウ「おう、行ってくるからな」  
でもって

アムロ「やつつけてきた」

一同「「はや!」「」」

アムロ「いや、一機だけだったし。」

リュウ「しかし、アイツなんかおかしかったよな。脱走兵がどうのとか言ってたし。」

ガルマ「私のせいで迷惑を掛けてしまっただろうか?」

カイ「ないない。さつきまで国葬されてたやつを脱走兵として追跡するなんてどういう状況だよ。」

リュウ「とりあえず、ブリッジに行つてブライトに報告してくる。行くぞアムロ。ガルマもあんまり変な事で気に病むもんじやないからな」

アムロ「らじゃー」

そしてブリッジに行く

タムラ「実はブライト艦長。先日の戦いで塩の備蓄庫が被弾してしまつて、塩の残量が残り僅かです。」

ブライト「それはまずいな…。」

ホワイトベース料理長のタムラさんとブライト艦長が深刻な顔をしています。

タムラ「なんとか塩の補充をお願いできませんか?」

リュウ「うん?どうした?塩がないのか?」

タムラ「ええ。幸い、現在大西洋の群島地帯を航行中です。どこかに少し停泊してもらえれば海水から塩を採れるのではないかと…」

リュウ「そんなに簡単なものかね?」

タムラ「ええ!大昔の人達はそうやって塩を得ていたんですよ!」

ブライト「うむ…。こここのところ連戦続きだったしな。1日くらい停泊しても何とかなるかもしれない。ミライくん。航行スケジュールを出してくれ。」

ミライ「たしかに、1日程度なら十分取り戻せる遅れね。」

ブライト「特にアムロには連戦を強いてしまつているからな。ここ

らで半舷休息をとるのもいいかもしれん。」

ミライ「それなら、こここの小島へ停泊してはどうかしら？」

ブライト「よし、進路をその島へとれ。無事停泊できれば半舷休息をとる」

一同「「ひやつほー！」」

ホワイトベースは一路、近くの小島へ進路をとるのですが

その小島では……

ドアン「うん？あれは!?連邦軍がこちらへ向かってくる!?ロラン、子供達を家の中の地下室へ頼む。」

ロラン「わかった。あなたはどうするの?」

ドアン「ザクで出る。話の通じる相手であればいいが。」

その島に住んでいるククルス・ドアンは自身のザクに乗り込みます。

もちろんそれはホワイトベースにも伝わっており……

リュウ「またザクかよ！」

カイ「またアムロにガンダムで……おい、アムロどうした?顔が真っ青だぞ?」

アムロ「ああ……あれは……戦っちゃいけない相手だ。」

ハヤト「アムロ、お前、顔真っ青だぞ。」

カイ「どう見たつてあのザク、普段戦ってるヤツより弱そうだろ?

武器ももってなさそうだし、なんかやたらほっそりしてるし。」

アムロ「ダメだ……。あれと戦って勝つイメージが見えない。」

リュウ「ブライト、アムロの様子がおかしい。」

ブライト「そうか。あのザク、攻撃する意志はないようだし、少し様子を見よう。」

やや離れて様子を見るホワイトベースとドアンのザク。

ドアン「聞こえているか。連邦軍。こちらには攻撃する意志はない。今すぐこの場を立ち去って欲しい。」

とそのとき……

……。よいしょ(のそのそ

どっぽん

やわらかボールが海に飛び込んだ!

博士「そしてこんなこともあるのかと、やわらか用浮き輪も既に用意しておいたのさ! ぽちつとなー!」

海の上に着水すると、大きな浮き輪でぶかぶかと浮かぶやわらかボール。

浮き輪ー・ω・(ぶかぶか

ドアン「なんだろう、この丸っこいの」

アムロすら畏怖するクルルス・ドアン。

その目の前に降り立ったやわらかボール。

果たしてやわらかボールの運命は!?

後編に続くぞ!

## やわらかボールとククルス・ドアンの島（後編）

ククルス・ドアンの駆るザクと対峙するやわらかボール！

浮き輪―・ω・）ノ　ドーも。やわらかボールです。

ドアン「どうも。ククルス・ドアンです」

挨拶は大事

ドアン「ふむ。武器を持たずに来たということは争いにきたわけではないのかな？ 一体何をしに来たんだ。」

浮き輪―・ω・）　あそびにきました

ドアン「は？」

浮き輪―・ω・）ノ　あそびにきました。あそんでください

ブライト「あ、いや、こちらは休息を取りに偶然この島に立ち寄っただけなんだ。害意はない。」

浮き輪―\*・ω・）　そういうことです

ドアン「だったら立ち去って欲しい。こちらもザクには乗ってるがジオン軍というわけではない。」

浮き輪―・ω・）？

ドアン「ああ、私はいわゆる脱走兵というヤツなんだ。ちよつと色々あつてね。ここで子供達と暮らしている。自給自足の暮らしというヤツだな」

浮き輪―・ω・）　ドアンさんえらい

ブライト「なら、取引できないか？ コチラは生活物資を供出できる。

1日の停泊と情報、それに塩が余っていればくれると助かる。」

ドアン「：詳しい話がしたい。非武装の代表者を寄越してくれ。」

そんなわけで、ドアンさんはブライトさんとお話をします。

その間

（#・ω・）ノ　こんにちわ。やわらかボールです。

タチ「なんだこの丸っこいのー」

クム「よわっちそー」

チヨ「へんなのー」

（#・ω・）　へんじやないです

タチ「あ、でもコイツすっげーやわらかい！」

(っ・ω・)っ やわらかボールですから。(ふかふか

やわらかボールは島で暮らしてる3人の子供達と遊んでました。

ブライト「ドアンさんと話がついたぞ。」

ブライトさんはドアンさんが脱走兵となって、この島で戦争孤児の子供達と自給自足に近い生活をしていることを知りました。

そして、いくつかの生活物資と引き換えに余剰の塩を交換してもらうことにしたのです。

さらに

ドアン「それだけの塩では心もとないだろう。手造りではあるが製塩施設もここにはあるからな。塩を作って行くといい。」

と、ドアンさんに塩づくりを教えてもらえることになりました。

(・・ω・・)ノ お手伝いします

アムロ「お手伝いします。」

リュウ「お手伝いします。」

カイ「お手伝いします。」

ハヤト「お手伝いします。」

ガルマ「お手伝いします。」

セイラ「お手伝いします。」

ドアン「じゃあ、やわらかボールとガルマさんとセイラさんは子供達と薪にする流木を集めてきてくれるかな？」

タチ「しょうがねえな！やわらかいのと前髪とねーちゃんだけじゃ心配だもんな！」

クム「流木がたくさん流れ着くのはあっちの方だよ」

チヨ「やわらかいこー！」

。。。 (・・ω・・) わかりました(のっそのっそ

ドアン「リュウくん、アムロくん、カイくん、ハヤトくんは私と一緒ににまずはこの箱にこの辺りの砂を詰めてくれるかい？」

リュウ「なんだ？海水を沸騰させればいいんじゃないのか？なんで砂なんだ？」

ドアン「うん。まずは濃い海水、灌水を作るんだ。その方が効率よ



く塩を作れる」

カイ「それと砂がどう繋がるわけ？」

ドアン「この辺りの砂は満潮時に波打ち際になるんだ。今は引き潮で大分時間も経っているから大分乾いていい具合に塩分を含んでいるんだ。」

ハヤト「へえー…。じゃあ次は？」

ドアン「この砂に海水を注げば、さらに塩分濃度の高い海水、つまり灌水が出来上がるのさ。」

カイ「なるほどなあー…。じゃあこの箱の中に砂つめて海水突っ込んで、そこからどうやって水だけとるのさ？」

ドアン「うむ。この箱の下の方にパイプがついていて、そこには目の細かい布で出口をふさいである」

アムロ「もしかして…濾過装置も兼ねてる？」

ドアン「ほう？察しがいいじゃないか。まず砂を敷き詰めた後に小さな砂利を敷き詰めてさらにその上に大き目の砂利を敷き詰めるんだ。そうすると簡易濾過装置になるわけだ。」

リュウ「すごいもんだなあ。ドアンさん。どうやってそんな事を覚えたんない？」

ドアン「なに。生きるのに必死だっただけさ。さ、薪が来る前に濾過装置とカマドを作ってしまったおう。」

一同「おおー！」

一方、薪にする流木を集めている組は

チヨ「いい？打ち上がって乾いたヤツを集めるんだよー？」

ガルマ「ふむ。君は物知りだな。」

タチ「お前がモノをしらなすぎなんだよ。ナヨっちい兄ちゃんっ」  
クム「あ、ねえちゃん、でかすぎるヤツは燃えづらいから薪にする

のはこのくらいのヤツがいいんだぜ」

セイラ「あら、そうなのね。」

(っ・わ・っ)っ そして、あつめた薪を運びます

セイラ「やわらかボールは力持ちね」

(\*・w・\*) てれるぜ

ガルマ「ところでセイラさん。君はシャアと知り合いか何かなのかい？」

セイラ「え、ええ。私の親類かもしれないと思っていました。あなたの話で確信を持ちました。」

ガルマ「そうだったのか…。」

セイラ「今度はこちらが聞いても？シャアIIアズナブルの話をするときにやけに辛そうにするのは何故なんです？」

ガルマ「それは…ニューヤークでの戦いとき、私がガウで木馬に突撃する直前にね…」

ガルマさんはセイラさんにその時、シャアと交わした会話の話を話しました。

セイラ「(兄さんは復讐の為に正体を隠してジオン軍に入ったのね…。)」

ガルマ「シャアとはいいい友人のつもりだったのですが…。何か怒らせるような事をしたのかなあ…。」

セイラ「(この人ぜんっぜん気付いてない!?)」

ガルマ「しかし、こうして生かしてもらえて感謝しています。あのまま何もわからぬままケンカ別れとあつては死んでも死にきれませんからね。」

セイラ「ガルマさんは、今でもシャア・アズナブルと仲直りをしたいと?。」

ガルマ「当然です」

セイラ「そうですね。あなたはとてもいい人なのです。」

タチ「よーし！これだけあれば足りるだろ！一度もどるぞおー！」

(…ω…)ノはい

セイラ「また後でお話しましょう。私にも少し考える時間が必要な事ができました」

そうして、たくさんの薪をやわらかボールのリユックに入れてドアンさん達のところに戻ってみると

大きな箱を使った簡易濾過装置と、石で組み上げた簡易カマドが既に出て上がっていました。

ドアン「よし、薪も来たし、灌水を作ろうか。」

カイ「よしてきた！ハヤト、やるぞっ」

ハヤト「はい！」

カイさんとハヤトくんの二人は既に汲み上げていた海水を簡易濾過装置に流し始めました。

リュウ「ちなみに、この海水もドアンさんが考えた水質浄化装置を使ってるんだぜ？すげえよなあ」

ドアン「いや、貝殻をまとめた網を防波堤内に沈めてあるだけだよ。」

ガルマ「それがどうして水質浄化に繋がるんだ？」

ドアン「ああ、それは、貝殻についている細かな凹凸が微生物の棲家になって、その微生物が汚れを食べてくれるんだ」

ガルマ「そうなのか…」

リュウ「俺達も最初聞いたときは信じられなかったんだけど、本当の事なんだ」

ドアン「自然の力というのは思っているよりも力強いものだね。」

セイラ「こうしてみると、地球環境を回復させる宇宙移民政策の目的も間違っではないなかつたのですね。」

ドアン「そうかもしれないな。さ、灌水を大鍋に入れて火にかけようか」

それから

(っ・ω・)っ おなべにかんすいをたしたり

つよくなりすぎないように、ひをちようせつしたり c(・ω・c)

(・・ω・) || 3 のんびりしたりします

カイ「しっかし不思議だよなあ」

ハヤト「何がです？」

カイ「いやなに、木が燃えてるのって見てると何かあきねーなと思ってる」

ハヤト「言われてみればそうですね。コロニーで火なんて燃やしたら怒られますからね」

カイ「環境がどうのこうのーって言われてなw」  
ハヤト「地球。いいところですねー」

カイ「地球。いいところだなー」

そんなこんなで塩づくりはのんびりと進んで行きました。

ドアン「で、灌水を蒸発させていくと塩が結晶化するから、それを取り出して、天日に晒して残った水分をとばせば一応の完成だ」

リュウ「結構とれるもんだな」

ドアン「途中で灌水を足しながら煮詰めたからね。」

ガルマ「しかし、知識としては知っていたが本当に出来あがるとは…。なんとというか感慨深いものがあるな」

ドアン「さ、塩を干し場に運んでくれ。日が出ているうちが勝負だからな」

ガルマ「ああ。わかった。」

アムロ「手伝います。」

ドアン「私も一緒に運ぼう。」

ガルマ「ところで、君はどうして脱走兵になったのかな？」

ドアン「地球降下作戦の際にね。私はあの三人の親を戦闘の巻き添えにしてしまったんだ」

ガルマ「そうだったのか…」

ドアン「そればかりか、私の上官はあの子供達も殺せと命令したのさ。ジオンを恨んで育てば遺恨を残すとか言ってるね」

ガルマ「そんなバカな!?!民間人への攻撃は南極条約違反になるのに!」

アムロ「ボクたちも元々は民間人だったんですけどね。サイド7ではたくさんの民間人もザクの攻撃で…」

ドアン「私にはあの子供達を殺す事は出来なかった。命令違反で殺されるつもりもない。だから子供達を連れて逃げたのさ」

ガルマ「…：ククルス・ドアン。君はあのザクを捨てるべきだ。」

ドアン「だが、ザクがなければ追手を追い払えない。」

ガルマ「あのザクは初期の地球降下作戦で使われたものだろう?それには予定外の場所に着地しても行方がわるよう、発信器を仕込んで

あるんだ」

アムロ「そういえば、途中でやつつけたザクがいたけれど、アイツはドアンさんを？」

ガルマ「おそらく、発信器を頼りにドアンくんを探しにきたんだろう。既にアムロくんが倒したようだがね」

ドアン「つまり、あのザクさえなければ、もう私達は追われる事もないと？」

アムロ「でも、どうしてそれを？軍機なんじゃあ…」

ガルマ「ドアンくんには世話になったし、地球方面軍司令として迷惑もかけてしまったようだからね」

アムロ「なら、あのザクをホワイトベースで引き取れないかブライトさんに相談してみます！」

ガルマ「よろしく頼むよ。」

そういうわけで、ドアンさんはホワイトベースで留守番してるブライトさんのところに行きます

ブライト「そういうことなら。」

ミライ「無傷のザクを鹵獲できるのはこちらにも嬉しいですが、ドアンさんはザクがなくなって平気なの？」

ドアン「正直言えば、何かあったときに逃げ出す手段がなくなるのはツライな…。」

ブライト「なら、ホワイトベースに備え付けられている海洋用の救難艇を一つ譲ろう。」

ドアン「本当にいいのか？非常に助かるが…」

ブライト「戦闘で失った事しておくから、連邦軍のものだとわかるような痕跡は消しておいてくれよ？」

ドアン「ああ、わかった。ありがとう」

そうして日も暮れていく頃

リュウ「塩、できたな」

ドアン「うん、上出来だ。」

、（・ω・）ノ ばんじゃーい

アムロ「やわらか頑張った」（なでなで

( \* ・ ω ・ ) Ⅱ 3 えっへん

アムロ「何か大切な事を、今日学んだような気がするよ」

ドアン「それはよかった。」

アムロ「ドアンさん、ありがとうございます。」

ドアン「私は何もしていないよ」

アムロはドアンさんと固く握手をするのでした。

そして、その日の夜はドアンさんの島でのんびりするホワイトベース一行でした。

そんな夜、ガルマさんはやわらかボールと浜辺を散歩するのでした。

( \* ・ ω ・ ) よるのさんぽ。おとなっぽいです

ガルマ「そうだね。君と一緒にだから私の散歩も許可してもらったよ」

( \* ・ ω ・ ) ? ところでガルマさん、なにをもっているんですか？

ガルマ「うん。これは空き瓶に手紙を詰めたものなんだ。」

( \* ・ ω ・ ) ? おてがみですか？

ガルマ「私の婚約者だった人に手紙を送りたいけれど、この状況じゃあ送れないから運だめしにねっ！」ぽーい

ガルマさんは手にしたビンを海に向かって放り投げました。

ガルマ「運がよかったら、きつとイセリナのところが届くかもしれないね。」

( \* ・ ω ・ ) 。。。 そういえばおてがみもらったことないです。

ガルマ「そうか…。うーん…そうだなあ…。じゃあちよつとだけ待ってくれないかな？」

ガルマさんは少し立ち止まると持っていた手帳に何かを書きつけてそれを破り取るとキレイに折りたたんで、もう一度そこに何かをかきつけます。

ガルマ「やわらかボールくんにガルマ・ザビさんからお手紙ですよ。」

( \* ・ ω ・ ) おてがみもらいました！

ガルマ「さ、どうぞ。」

ハ、シ、ω、ノシ よんでもいいですか  
ガルマ「もちろん」

『やわらかボールさま』

たすけてくれてありがとう。

きみがたすけてくれなかったら、こうして ちきゅうが うつくしいことをしらないままだった。

それにいきていけば まだ できることがたくさんある

だから おれいのおてがみを かきました

もういちど、ありがとう。

ガルマ・ザビ』

、(\*・ω・)ノ おてがみうれしい！

ガルマ「そうか。喜んでもらえてよかったよ」

(\*・ω・) Ⅲ あとではかせに たからものいれにいれてもらいます  
す

そうして、夜も更けていき

翌朝、ホワイトベースは出発します

アムロ「ドアンさん。上手く言えないけどあなたには大切な事を教わった気がします」

ドアン「私は何もしていないさ。何かに気付いたというならそれは君自身が見つけたんだ。大切にしたらいい」

アムロ「はいっ！」

リュウ「戦争が終わったらまた色々教えてくれよな」

カイ「俺は肉体労働はごめんだけだな」

ハヤト「とかいいつつ、結構楽しそうに作業してたじゃないですか」  
ブライト「さあ、そろそろ出発するぞ」

ドアン「みんな気をつけてな」

ドアンさんのお見送りのもと、ホワイトベースは再び旅立ちます。  
ドアン「なかなか見どころのある若者達だったじゃないか」

ドアンさんはホワイトベースが見えなくなるまで見送るのでした  
そして、ホワイトベース内では

コタツ一・ω・)

ガルマ「ふうー」

セイラ「あの、ガルマさん、少しお話しても？」

ガルマ「はい、なんでしょう？」

はてさて、セイラさんのお話とは一体なんでしょう？

次回に続くぞ!!